

この授業では……

高校までの日本史や文学史は、覚えることが中心ですが、大学で学ぶ文学史は、どうして文学が変化したのかということを考えることに重点がおかれます。だから、作品と社会と作者の関係を考えてゆきます。

この授業では、古代社会で歌はどのように歌われたのかということを、出土した考古資料を使って考えます。

上野 誠



担当教員：上野 誠（うえの・まさと）プロフィール
大學生時代から、文学と社會との関わりに関心がありました。今は、「万葉集」を単に文学として考えるのではなく、その文化的側面を考える万葉文化論という學問を標榜しています。一九六〇年福岡県生まれです。

メッセージ

上野先生がどのような資料を使って、古代の歌の歌われ方を復元してゆくか注目して下さい。推理小説のように推定を重ねてゆきます。お楽しみに！

◎1限目◎国文学史 万葉時代、ヤマトウタはどのように歌われたのか？

——馬場南遺跡出土木簡は語る！——

授業のはじめに

はい、よろしいですか。静かに。これからは私の話を集中して聴くように。前回の授業で話したように、「万葉集」は七世紀後半から八世紀中葉までの歌を集成したいわば古代の「ヤマトウタ全集」みたいなものなんだね。ヤマトウタすなわち日本語の歌だよね。

そこで、今日は歌の楽しみ方について考えてみよう。ヤマトウタに限らず、ウタというものはね。五つの楽しみ方がある。一つ目は歌を作る楽しみ。二つ目は、歌を文字に書いて楽しむ楽しみ。三つ目は、耳で聴く楽しみ。四つ目は、書かれた歌を目で読んで楽しむこと。五つ目は、声に出して歌うという楽しみ。

【うたの楽しみ方】

- ①作る 作歌・作詞（どうやつたらよい歌ができるかな）
- ②書く 書いて送るラヴレター・書（どういう文字遣いをしようかな。美しく書きたいよ）
- ③聞く ライヴ・ラジオ・CDなど（あー、声心に沁みるうー）
- ④読む 読書・字幕（文字で自分のペースで読むと、よくわかるなあ）
- ⑤歌う 独唱・合唱・カラオケ・鼻歌（やつぱり、口に出すとスッキリする）

もちろん、それらはミックサれるし、ヴィジュアル系の歌手だと、見る楽しみもあるわけだが、一応は以上のように整理しておこう。これらは『万葉集』の時代も同じでした。皆は、千三百年も前のふるーいことだと思うかもしれないが、人類の歴史からみればつい昨日のことだともいえる。いいかな、ここまでは、皆わかつたよね。じゃあ、今日の授業の主眼とするテーマを言うよ。

今、私たちが読んでいる『万葉集』の歌々が、『万葉集』という歌集に収載される前に、どのように、歌われたり、書かれたりしたかということを、今日は皆さんといっしょに考えたいと思います。しかも、もつたいつけていうわけじやないけど、最新の資料を使って、新しく考えた分析をわかりやすく話すからね。さらに、これまたもつたいつけていうわけでは

ないが、半年かかって上野先生が考えたことを、九十分にまとめて話します。でもね、最新だということは、間違っている可能性も大きいということだから、注意して聴くように。まあ、試論を披露することだね。

つい最近のことなんだけど、歌を記した木簡の出土が相次いでいるんだ。木簡すなわち木の札だよね。それらの木簡は、「歌木簡」と分類される形狀的特徴および書記上の特徴を有しているんだ〔栄原二〇〇七年〕。その特徴とは、復元すれば二尺（約六十センチ）になる縦長の木簡でね、一行書き・原則一字を一音で書く書き方という特徴があるんだ。歌木簡はね、七八世紀における歌の書き方を探る貴重な資料となるばかりでなく、歌集に収載される以前の歌のありようを推定する資料となり、今後の万葉研究にも少なからぬ影響を持つ資料となることは間違いないよね。でもね、これまでの万葉研究を踏まえて、これらの歌木簡をどのように考えればよいのかという点については、方法論の検討も含めて、研究はまだスタートしたばかりなんだ。

そこで、今日の授業では、京都府木津川市の馬場南遺跡出土の歌木簡について、未熟ながらも上野先生が考えた説を述べてみる。でも、繰り返し言うように、あくまでも試論だからね。上野先生が、間違っているかもしない。このことは忘れないように。